

知求会ニュース

2004年04月

第9号

進学おめでとうございます！

長沼敬一(国際文化研究専攻・2期生)さんは、昨年の秋期に東京農工大学大学院連合農学研究科(博士課程)生物生産学専攻に進学されました。今春同研究科生物生産学専攻に平井雅世(国際社会研究専攻・4期生)さんと吉川光洋(国際社会研究専攻・4期生)さんがそろって進学されました。今年話題の日本版ロースクールには大井咲子(国際社会研究専攻・4期生)さんが、獨協大学法科大学院法務研究科法曹実務専攻に進学されました。昨年の秋に修了された川本紀美子(国際社会研究専攻・2期生)さんは神奈川大学大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程に進学されました。また、同窓会の監事である中島耕二(国際文化研究専攻・2期生)さんが、東北大学大学院文学研究科博士課程後期日本史専攻に進学されました。さらに、富樫壮央(国際文化研究専攻・4期生)さんが、麗澤大学大学院言語教育研究科比較文明文化専攻博士後期課程に進学されました。進学者の今後の研究成果が期待されます。

教員人事異動

中野重信教授

文化基礎研究講座所属の中野先生が3月31日付で定年退職されました。先生は教養部に24年、国際学部に10年在籍されました。大学院では1期生からお世話になり、本年2月17日(火)には最終講義が行われました。大変興味深い講演だったと参加者から訊いています。次号の研究室訪問02コーナーで、先生の「宇大の思い出」について掲載します。(関連記事が「学園だより」No.68 - 2004年1月の14頁に掲載されています。)

清水学教授

地域比較研究講座所属の清水先生が3月31日付で退職されました。4月からは、一橋大学大学院経済学研究科教授として活動されます。先生には大学院で1期生からお世話になりました。5年間という間でしたが、昨今イラク問題で、アラビア語圏の時事が取りあげられていますが、先生からは生きた知見を多くの学生が得たことと思います。本当に、いろいろありがとうございました。

両先生の今後のご活躍とご健康を祈念し、また知求会交流会などで再会できることを楽しみにしています。

2003年度学位授与式報告

2004年3月24日水曜日午後1時15分から国際学部大会議室にて開催されました。今年度の修了生は、国際社会研究専攻 小端真由美さん(明治安田生命勤務)・酒入明子さん(栃木県子ども総合科学館勤務)・酒入知子さん(栃木県子ども総合科学館勤務)・平田拓也さん・林飛さん・安藤正知さん(宇都宮市民活動センター就職)・王エイさん・大井

咲子さん(独協大学法科大学院進学)・キム=アントンさん・金智娟さん・金賢友さん(大船就職)・嵯峨健太郎さん(リコーテクノシステムズ就職)・武田祐也さん(進学)・原理恵さん(栃木ニコン就職)・平井雅世さん(東京農工大学大学院進学)・吉川光洋さん(東京農工大学大学院進学)・柳慶花さん(フジ・オーネ・テクノ・ソリューションズ就職)・草島美香さん(ノル・コーポレーション就職)の 18 名と国際文化研究専攻 石原恵子さん(日本語講師)・江後大樹さん(ホテルオオクラ就職)・河野孝子さん・田邊知成さん(セントメリー日本語学院非常勤講師)・デビット=ダイアナ=大野さん(英語講師)・高如正さん・伊藤真哉さん・岩村吏佐子さん(イギリス留学)・兪文さん(アガスタ勤務)・高橋美貴子さん・李顯珠さん・鳥恩さん(三浦グリーンビジネス就職)・荻野こずえさん(創価大学日本語教師資格コース進学)・九ロクさん・倉持美沙子さん(すが野就職)・田中瑠美さん(宇都宮大学留学生センター就職)・段笑嘩さん(西安外国語大学日本語学部教師)・富樫壮央さん(麗澤大学大学院進学)・三浦弘匡さんの 19 名で、計 37 名でした。記念撮影の写真は、みなくるねっと(<http://www.minakueu.net>)のアルバムで見られます。

栃木日本語教育研究会主催・第 1 回発足記念講演会報告

2004 年 2 月 28 日(土)午後 1 時から 3 時まで、国際学部 C 棟 4 階国際交流学習室において国語研究所日本語教育部門第二領域長柳澤好昭先生を迎えて、「**今後の日本語教育の動向**」と題した講演会が開催されました。参加者は、一般 12 名・学生 6 名・主催者 3 名の計 21 名でした。先生の略歴は、大学では心理学を専攻し、実験心理学から言語心理学に興味を抱かれ、自動翻訳に関わることでコンピュータを理解し、経営管理の MBA(経営学修士)を取得されました。これまでに、日本語教育や日本語教育調査研究に従事され、日本語教育推進施策の企画立案に関わってこられました。研究のキーワードは、コミュニケーション・ストラテジー、言語接触、教育経営、教師研修計画、学習効果です。講演の内容は、先生のさまざまな体験を通して、日本語教育の問題点を指摘されました。特に、教室と生活用語のズレを指摘し、教材研究にも工夫が必要であることです。先生から WEB 問題作成ツールなどの CD が、プレゼントとして参加者に提供されました。先生が強調されたことは、教師の考え方が一番大切であることで、目標をどう掲げるか・1 人 1 人がどう考えるか・コンピュータをどのように使うかを提示しました。また、日本語教育には、学問領域はなく、アプローチは多様であることが、「国語」から「日本語」への推移を象徴しているように思われました。そして、国際語としての日本語の可能性と日本文化の理解につながっていくのではないのでしょうか？

掲載記事紹介

朝日新聞朝刊栃木版の 2 月 5 日に、「宇都宮大とチェコの大学 学术交流を橋渡し」と題して進藤一幸(国際文化研究専攻・1 期生)さんを紹介した記事が掲載されました。

新企画 研究室訪問 01 今回から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いした新しいコーナーを設けました。第1回目には、アメリカそして韓国と在外研究と研修をされてきた中戸祐夫先生にお願いしました。

地域研究とは何であろう。最近、少し、このようなことを考えている。これまで特定の地域の研究をおこなっているという意識はなかった。自己の問題意識としては、あくまでも国際関係の視点からの日米関係であった。ところが、研究対象を日米韓の関係として考えようとする際に、急に地域研究とはなんだ、という問いを突きつけられているような気がする。それには、色々な理由があるとおもうが、今回はとくにその点については触れない。こうした問題関心に対して、必ずしも明確な形ではないが、ひとつの議論を投げかけてくれるピクター・チャーという韓国系アメリカ人の研究者がいる。過去一年半にわたってワシントンとソウルで研修を行う機会を得たが、チャーの研究は米国および韓国はもちろん、おそらく日本の国際関係論や韓国研究者の間でも議論を呼ぶものであろう。

チャーは、これまでの（アジア）地域研究とは一線を画する新世代の研究者と言える。韓国のいわゆる「386世代」に相当するチャーは、日韓関係を歴史問題としてよりも、あくまでも国際システムの点からとらえようとする。ワシントンに滞在中、北朝鮮の核開発プログラム問題が発生したり、2003年が米韓同盟形成50周年に当たったりしたため、朝鮮半島問題に関する各種のシンポジウムが頻繁に行われていたが、その際に、必ずといっていいほど登場し、いまやワシントンにおいてもっとも注目を集めている研究者の一人として、その地位を確固たるものとしつつあった。

チャーは、日韓関係の協調と反目を歴史問題や北朝鮮に対する脅威として捉えるのではなく、米国が朝鮮半島問題に対して関与を弱める際に日韓が認識する「見捨てられ」の脅威、あるいは、対朝鮮半島政策で強硬姿勢をとることによって、日韓が「巻き込まれる」場合の脅威を、日韓が同程度に認識するときに、日韓の協調関係が形成すると議論する。この議論によれば、日韓の協調は歴史問題の「解決」や大衆レベルでの文化交流の増大とは無関係に展開してきたことになる。同様に、領土や歴史問題が存在していても、「巻き込まれ」や「見捨てられ」の恐怖によって、日韓関係は協調できる。いずれにせよ、日韓が同盟関係を通して米国に依存するという特殊な状況にある点に留意する必要があるが、日韓関係を米国の政策に対応する従属変数としてとらえた研究であり、日韓の研究者にとっては意外と死角であったかもしれない。そして、安全保障問題を日韓関係の決定要因として捉えている点からも、国際システムに着目するリアリストの議論である。

チャーの研究に対しては、いうまでもなく否定的な評価も存在する。従来の地域研究では、長期にわたって特定地域に滞在し、言語能力や文化に対する理解を得ることが地域研究者の最低限の条件であったとすれば、こうした常識を必ずしも踏襲していない。チャーは米国の外交資料を中心に研究を行っているが、日韓の文献には必ずしも精通しておらず、とりわけ、日本側の資料は事実上無視している。先日行われたソウル大学国際関係大学院

主催の「日韓関係の未来」という研究会で発表したある研究者は「日本には検討に値する研究がない」といってきたチャーについて、「これほどばかげたコメントをみたことがない」と逆に痛烈に批判していた（ちなみに、チャーはこの著書によって大平正芳賞を受賞している）。

しかしながら、チャーの議論について、単に日韓の文献に精通していないという理由で否定的な評価を下すことは論点を見失うであろう。むしろ、チャーの研究の視点からすれば、それらは必ずしも重要ではない。換言すれば、米国の北東アジア政策によって変化する日韓のパーセプションを把握するのに、米国の外交資料で十分なのである。むしろ、チャーの貢献は、国際関係論の理論家が理解できる言葉をつかって日韓関係のダイナミズムを解明したことにあり、必ずしも同地域に関心を有さない理論家にも受け入れられる理論的貢献を行っている点にある。したがって、これまでの叙史的な歴史研究や単なる地域の紹介とは異なり、国際関係論の主流派（リアリスト）の言葉を使った「アナリティカル」な稀有な研究であるがゆえに、米国の国際関係学会で急速に認知を受けているのである。また、アメリカの政策によって日韓関係が変化する点を理論的に解明したのであるから、アメリカの政策担当者らにとって、これほどどうってつけの視点はなく、当然、ワシントンでの発言力も強まっているのである。

いずれにせよ、チャーの研究をどのように評価するにしても、今後、地域研究においても理論的貢献は一層強く求められていくであろう。とりわけ近年、アメリカにおける地域研究の分野ではこの傾向は顕著である。なぜなら、理論的枠組みがない地域研究では、主要大学ではテニユアポジションを獲得できないのである。これまでアメリカの地域研究を牽引してきた著名なアジア研究者らが、理論や分析の枠組みがないとの理由でテニユアを獲得できないケースは多々あった。なぜなら、どれだけ長期間にわたって滞在し、当該地域の言語を習得し、長年にわたって研究を行っても、その分野での理論的貢献が行われていない場合には、評価の対象とならないからである。逆に、チャーのように、必ずしも日韓の言語に精通しておらずとも、国際関係論への理論的貢献は可能であるし、また、事例研究のひとつとして地域を取り上げる比較研究（経済学や数量政治など）でも、理論的貢献が行われていれば、そちらの方が明らかに高い評価を得るのである。

むろん、こうした形での地域研究の発展を懐疑する見解も当然であろう。むしろ、日本の文脈では、すくなくともこれまでは、こうした見方の方が主流であったかもしれない。日本の防衛研究所の武貞氏は、かつて外務省の朝鮮半島専門家（として活躍された町田氏）から、「日本人が公の場で朝鮮半島問題について発言するのは、最低20年研究してからにしろ」と叱責されたという。ワシントンで行われたある研究会でお会いした際に、この点について伺ったところ「20年やってようやく見えてきたよ」とおっしゃっていた。必ずしもアメリカの学会状況を意識した発言ではないが、上の論点を考える上でも示唆的な発言である。また、昨年11月、一時帰国をして参加した「北東アジアの新世紀」というシンポで民族博物館の研究者と話す機会があったが、「国際関係論の研究のように、フ

ールドも行わず、一次資料も使わず、議論をしてしまっているのか」と疑問を呈されたことも思い出す。

上のどちらの手法が優れているのか、という議論それ自体は、結局、神学論争に陥るだけであろう。さらに、実際には、理論だけ、あるいは地域だけ、というような研究は存在しないだろうし、どちらに力点を置いているか、という問いになるのであろうが、この問題はやはり、地域研究とは何か、という根源的な問いに行きつかざるを得ない。個人的には、長年その地域にかかわり、言語を習得し、人々と交流しながらなんとなくわかる(?)というような、その感覚的なものに対して、けっして懐疑的ではない。単なる事例研究として地域を取り上げることで理解できない要素が多々あるように思われるからである。ただ、それらをどのように言語化するかを考える際には、理論が必要なのだろうか、という程度の認識である。とくに、経済学や比較政治学などでも、とりわけ「科学」を標榜するグループからは地域研究は「理論的にナイーブ」であると厳しい批判を受けている状況があることにも留意せざるを得ないであろう(もっとも、批判理論やポストモダンからは、「客観的科学」なる研究のまやかさも指摘され、理論自体についても合意が得られているわけではないが)。

結局、地域研究について少し考えた、などといえども、何も分かっていない。無理もない。これまで地域研究を行ったという自覚もないのであるから。それに、上に述べた内容は、あくまでも国際関係論(および隣接領域)という地域研究であり、おそらく全く異なる認識をもっている研究者も多々いるであろう。にもかかわらず、来年度から「地域研究論」をリレー講義として一部担当しなければならなくなったが、果たして自分でいいのだろうか、と自問してしまう。ただ、明確なのは、色々とのべてきたけれど、結局、自分はアメリカや韓国が好きなのだなあ、ということである(むろん、あくまでも観察者としての立場である)。もしかすると、地域研究者と事例としてのみ取り扱う理論家(そういう人がいれば、だが)との差は、案外そんなところにあるのかもしれない。つまり、関心の差といえいいのだろうか。

もっとも、アメリカとはなにか、韓国のどこが好きか、お前はどれだけわかっているのか、などという問いはしないほしい。なぜなら、そのような問いには応えられないからである(ちなみに、リアリストは、国家を所与のビリヤードボールとして捉えるので、中身を問わないのです)。個人的には、過度な科学性を追及するのは好きじゃないし、といってポストモダンの言説をめぐる議論にも抵抗がある。なんといっても、これら二つを行う能力もない。結局、少しずつ、特定の地域について歴史や言語などを勉強しつつ、国際関係論の概念をつかって説明していくというのが、自分のできることだと思う。また、そういうのが、好きである。

今後も、可能な限り、これらの地域と継続して関わって行きたいと思う。少なくとも今は、地域研究者という自覚はないけれども。

新企画 知究人 01 今回から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いした新しいコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第1回目には、知求会の相談役である国際学部同窓会会長 吉葉恭行氏にお願いしました。氏は、今春東北大学大学院国際文化研究科博士課程後期を修了され、国際学部第1号の博士号取得者となりました。

「素朴な問題意識」を昇華させて(博士課程を修了して) **吉葉 恭行**

みなさんこんにちは。私は、第一期生の吉葉と申します。1999年の卒業と同時に東北大学大学院国際文化研究科の博士課程に入学、今年の3月に修了し博士号(国際文化)を取得いたしました。宇都宮大学大学院国際学研究科の修了生ではないので「知求会ニュース」への投稿は気が引けたので最初に依頼を頂いた時にはお断りしたのです。しかし国際学研究科の土屋会長とは以前から交流があり、私が国際学部の同窓会長をしていることからなにかにつけてご助言・ご協力を頂いています。その土屋会長からのご要望にお応えしない訳にはまいりません。そこで簡単ながら修了のご報告をさせていただきます。

私は宇都宮大学国際学部に社会人入学する前には、工学部卒のエンジニアとして8年間にわたり生産設備(ロボット・自動機・搬送機など)の生産・輸出に携わってきました。その際の経験と「素朴な問題意識」を学術的にまとめたものがこの博士論文であると位置付けています。「素朴な問題意識」について話をはじめると長くなるので誤解を恐れずに端的にいつてしまえば、「我が国の行なっている技術移転・技術協力は移転先の途上国に対してどれほどの貢献を果しているのだろうか、また貢献しうる技術移転・技術協力とはいかなるものだろうか」という大命題でありました。

博士論文の題目は「我が国の製造業の国際的技術移転とその特質」であります。いわゆる技術移転について論じたわけですが、私が論文中で特に重視したところは、生産にかかわる技術は一企業・一産業内にとどまらずシステム全体として捉えられなければならないという点と、移転される技術が我が国においてどのように発達してきたのか、その際に生産の現場はどのように変化を遂げて来たのかという点でありました。これらの視点は従来の技術移転論にはなかったものであります。

このような視点から論じる必要上、検討対象とした産業も鉄鋼業・自動車工業・電気機械工業・電機部品工業・金型工業と多岐にわたりました。また対象にした時期は第二次世界大戦後としましたが、現象論的なものに留めないようにと、我が国の製造業がなにを契機として発展してきたのか、またいかなる理由から海外進出を行い、どのような技術を移転してきたのか、時期を戦後に限定することなく分析しました。

技術移転というと技術水準の高い国から低い国、すなわち先進国から途上国へという「イメージ」のもとに論じられることが多々あり、この「イメージ」のもとで「技術協力」という用語が使われることも多いのです。しかし、実際に様々な産業分野を調べてみると、例えば電気機械工業の水力発電機器などは、途上国のみならず欧米などの先進国に対しても1950年代より輸出するなど想像以上に早い時期より技術移転が行なわれていることが明

らかになりました。

そもそも一国を包括的に規定する「技術水準」という抽象的な概念が存在するわけでもなく、具体的にはいかにいいモノを安価にできるかということがそれぞれの製品分野の「技術水準」の「基準」となっているのであり、それぞれの製品分野においてこの「基準」に従って技術が対価を媒介として取引されているのです。また論文中では我が国の「技術水準」の高度化過程において生産現場では様々な問題が顕在化してきたことについても論じました。

論文全体としては、我が国の製造業の国際展開と技術移転は基本的には企業活動の原則である利潤動機のもとに行なわれてきたことと、これらの諸活動は製造業の発展契機となるべきものであるにもかかわらず一方では自らの技術的な存立基盤を掘り崩しかねない状況をつくり出してしまっているという矛盾を示せたと思います。

以上のように私は国際学部入学前の「素朴な問題意識」を博士論文にまで昇華させることができました。この昇華は大学院における指導教官（井原聰教授）の下での研究成果であることは言うまでもありませんが、研究生活の入り口として入学した国際学部において多様な研究分野の先生方から社会科学の基本や様々な研究スタイル、あるいは多様な人生スタイルの可能性に至るまで多くをご教授いただいたこと、現在も交流が続いている同窓生との議論などが励みやヒントを与えてくれたことなど、国際学部での4年間で現在の研究の糧となっていることを見過ごすわけにはいきません。またこの紙面で博士課程後期2年目の春に誕生した娘2歳と妻に謝意を示すことをお許しいただきたいと思います。後期1年目の春に父を亡くした私にとって、翌年の娘の誕生は励みになりましたし、私より早く文字通り「生みの苦しみ」体験してくれた妻から論文を世に出すための「産みの苦しみ」に立ち向かう勇気をもらいました。

博士論文を一区切りとはしましたが、残された課題も多く技術をめぐる研究はもっと深めていかなければなりませんし、そうしたいという思いを大変強く持っています。修了後の今年度は同研究科の専門研究員として「独立した研究者」としてのスタートを切りました。今年度は博士課程修了後の更なるステップ・アップのための重要な一年であると位置付けて研究成果を公表していきたいと考えています。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2004年の春を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦労しています。）今回、第9号に寄稿をお願いしたのは、今春博士後期課程に進学する社会の今井研究室OG・川本さんです。

2 期生近況報告

「身近な国際レース」

川本 紀美子

国際学部に在籍する学生は県外出身者が9割近いと聞いたことがある。真偽は確かめていないが、実際周囲を見ても全国各地から集まっている印象が強かった。これはひとえに国際学部の全国的な人気をあらわすものであろう。けれども同時に、宇都宮の地元イベン

トに対する関心が低くなっていないだろうか。宇都宮での思い出の舞台が大学やアルバイト先周辺に限られてしまっては寂しい。

そこでぜひお勧めしたいのは10月末に開かれる国際自転車レース「ジャパンカップサイクルードレース」観戦である。JR駅前のロータリーにも大きな看板がでているが、帰省時期ではない学期最中の週末に、世界的なイベントが市内で行われているチャンスを見逃す手はない。レースは宇都宮市森林公園一帯の周回コース全151.3kmを11周、4時間余りで走りきるもので、過去12回開催されたうちにはワールドカップ最終戦となったこともある大きな大会である。

自転車競技は大まかに、競技場で行われるトラック競技、一般道を使うロード競技、オフロードで行われるマウンテンバイク競技に分けられる（トラックとロードはオリンピックの正式種目に採用されている）。「ジャパンカップ」はロード競技になるが、ロードはツール・ド・フランスやジロ・デ・イタリアなどに代表されるようにヨーロッパで大変人気が高い競技で、ジャパンカップ参加も半数は欧州チームである。個人戦でありながら、チームごとの戦略による激しい駆け引きがあり、一筋縄でいかない欧州独特の気質も実感できる。

私は宇都宮に引っ越してきた翌月に初めて観戦に出かけたが、以来何度見ても飽きることがない。沿道で声援を送っていると、思わずこちらがのけぞるほどすれすれに走り抜けていくスピード感、特にゴール地点でのスピード勝負は目を見張るものがある。また190mの高低差を駆け上っていく迫力を間近で見ようと坂下から山頂付近のコースは観客であふれかえる（主催者発表では毎年5万人以上）。スタート・ゴール地点では大型ビジョンによる中継も行われ、協賛メーカーのオフィシャルショップや飲食屋台が立ち並んで、雰囲気盛り上げている。大会直前には市中心部の大通りを選手が練習走行する姿も見られ、宿泊ホテルやコーヒーショップ、そして餃子店（パスタに似ていてイタリア人選手に人気らしい）はファンや選手の家族、関係者で華やかな雰囲気になる。

実際に選手と話をして日頃の語学鍛錬を試すこともできるし、試合前日のオープンレースで健脚に酔うことも出来る。せっかく宇都宮近郊で生活しているのだからぜひ一度、この世界的なレースを実際に味わって、学生生活の思い出を増やしてください。

（詳しくはジャパンカップHP：毎年レース前に更新）

（国際学研究科 国際社会研究専攻 第2期修了生）

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆さんのご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い**：

住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net